

# くりはらの大豆だより

宮城県栗原農業改良普及センター

令和6年度 第2号 令和6年8月22日発行

TEL 0228-22-9404

## 大豆栽培の今後の管理のポイント

■湿害/干害対策 ■高温対策 ■適期の病害虫防除

### 気象経過（築館アメダス）

- ・**6月**：月平均気温は平年よりもやや高くなりました（平年差+0.6℃）。月降水量は平年より少なくなったことにより（平年差-76mm）、月日照時間は平年より多くなりました（平年差+32時間）。梅雨入りは6月23日ごろとなり、平年より11日遅く、昨年より14日遅くなっています（仙台管区气象台）。
- ・**7月**：月平均気温は平年よりも高くなりました（平年差+1.4℃）。月降水量は8～11日（123mm）と25～26日（151mm）にかけてまとまった雨となり、平年よりも多くなりました（平年差+92mm）。また、月日照時間は平年並みになりました。
- ・**8月(1～20日)**：月平均気温は平年よりも高くなっています（平年差+1.4℃）。月降水量は平年より少なくなったことにより（平年差-45mm）、月日照時間は平年より多くなっています（平年差+29時間）。梅雨明けは8月1日ごろとなり、平年より8日遅く、昨年より10日遅くなっています（仙台管区气象台）。

### 生育状況

－生育量はタンレイ、ミヤギシロメともに平年並み－

◎生育調査ほ（8月13日調査）

- ・タンレイ及びミヤギシロメでは主茎長、主茎節数、分枝数ともに平年並みとなっています。開花期はタンレイで平年より5日早く（7月25日）になっており、ミヤギシロメでは播種が平年より8日遅かったため、開花日は5日遅れの8月10日となっています。

表1 生育調査結果（8月13日調査）

品種 地域		播種期	主茎長	主茎節数	分枝数	開花期
タンレイ 志波姫 刈敷	本年値	6/7	77.2 cm	15.3 節/本	2.4 本/本	7/25
	平年差	1日遅	+1.0 cm	-0.4 節/本	-0.2 本/本	5日早
ミヤギシロメ 若柳 三田鳥	本年値	6/7	89.8 cm	16.3 節/本	1.6 本/本	8/10
	平年差	8日遅	-1.8 cm	+0.5 節/本	-1.0 本/本	5日遅

※平年差は過去5年（R元～R5）の平均値との差です。

## 湿害/干害対策

### <湿害対策> – 降雨が続く場合に実施 –

子実が肥大する生育後期の土壌過湿は、根の呼吸阻害や根粒菌の活性低下を引き起こすことで窒素供給が抑制され、減収につながります。

- ・暗きよを開放して、地下排水を促しましょう。
- ・大雨の後や長雨のときは、排水溝が詰まっていないか、また明きよに水が溜まっていないかを確認し、必要に応じて修繕しましょう。

### <干害対策> – 晴天が10日間以上続きそうな場合に実施 –

開花期以降は、それ以前の3~4倍の生育量となり、多量の水分を必要とします。不足すると落花、落莢、不稔莢が増加し、減収につながります。

- ・暗きよを閉じる等、水分保持に努めましょう。
- ・かん水が可能な場合は、畝間の土壌表面に水がしみ出す程度、ほ場に水分を補給しましょう。

## 高温対策

### <高温等の影響>

- ・開花期以降は、養水分吸収が多くなる時期のため、高温条件下で土壌水分が不足すると着莢率の低下や胚珠の生育停止がみられ、子実肥大も劣る。また、「莢ずれ」が発生しやすくなり、外観品質が低下する。
- ・カメムシ類やアブラムシ類など、吸汁性の害虫が発生しやすくなる。
- ・着莢数の減少により、青立ちの発生や2番花の開花などがみられる。

### <令和5年の高温による影響>

- ・ハダニの発生により、スポット的に株枯れがみられるほ場がある。ハダニの発生はほ場全体に広がっている（7~8月の報告）。
- ・ハダニやチョウ目幼虫の多発生、水分バランスのくずれによる枯死（9月）。
- ・一部で着莢数減少、莢の伸長停止（10月）。
- ・青立ちの発生、株内の登熟のばらつきによる収穫の遅れ。

### <技術対策>

- ・高温・少雨により乾燥状態が続く場合は、明きよを利用した通水や、暗きよの水こうを閉めるなど、水分保持に努める。
- ・害虫類の発生動向に注意し、適期防除に努める。

※かん水は慎重に検討（排水不良ほ場では湿害が発生する心配があります）

適期の病害虫防除

処理時期	対象病害虫	防除方法・時期の目安など
7月下旬 ～ 8月上旬 (発生に応じて 適時防除)	<b>ウコンノメイガ</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食害が目立つのは8月中旬以降であるが、この時期は老幼齢であり、薬剤防除効果が低い。</li> <li>・幼虫による葉巻数(写真1)が要防除水準を上回っている場合には(要防除水準：大豆1本あたりの葉巻数が1つ以上の場合)、7月下旬から8月上旬にかけて薬剤防除を行う。</li> </ul>
8月上旬 ～ 8月下旬 (発生に応じて 適時防除)	<b>オオタバコガ ツメクサガ ハスモンヨウ</b>	<p><b>【オオタバコガ/ ツメクサガ】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・食害が早く、中齢幼虫以上(写真2)になると葉及び莢を食害し、被害が大きくなるため、早期発見と早期防除が重要となる。</li> <li>・若齢幼虫は未展開葉を食害するため、未展開葉が食害されていた場合は適時防除を行う。</li> </ul> <p><b>【ハスモンヨトウ】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・若齢幼虫期の防除が効果的であり、白変葉(写真3)が増加したところの薬剤防除が効果が高い。</li> </ul>
8月下旬 ～ 9月上旬  (病害虫防除 ①、②)	<b>紫斑病 マメシンクイガ ダイズサヤタマバエ フタスジヒメハムシ カメムシ類 サヤムシガ類 アブラムシ類</b>	<p><b>【紫斑病】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・莢の発病は開花30日後以降に急増するので、この時期(若莢期)に重点を置いて適時防除を行う。</li> </ul> <p><b>【マメシンクイガ、ダイズサヤタマバエ、フタスジヒメハムシ(写真4)、カメムシ類】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・この4害虫は同時防除が可能となる。薬剤散布は8月下旬が1回目、その7～10日後に2回目の散布を行う。</li> </ul> <p><b>【サヤムシガ類】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・莢や莖葉を糸でつづり合わせて食害する(写真5)。発生した場合は、8月中下旬(若莢期)に適時防除を行う。</li> </ul> <p><b>【ジャガイモヒゲナガアブラムシ(写真6)】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生育後期(8月下旬～9月上旬)に発生がピークに達し、ウイルスの媒介や早期落葉による収量・品質の低下要因となる。</li> <li>・多発する恐れがある場合、発見後に適時防除を行う。</li> </ul>

ウコンノメイガによる葉巻症状



写真1

ダイズサヤムシガによる食害



写真2

ハスモンヨトウによる白変葉



写真3

フタスジヒメハムシ(成虫)食害



写真4

オオタバコガ(幼虫)による食害



写真5

ジャガイモヒゲナガアブラムシ



写真6

害虫の発生推移の予報を発表するものです。発生病害虫に合わせて、効果的に防除を行いましょう。

▶紫斑病・・・・・・・・発生量「平年並」

- ・開花期の20～40日後に1～2回の薬剤防除を実施しましょう。
- ・同一剤の連用は耐性菌が発生しやすくなるため避けましょう。

▶吸実性カメムシ類・・・・・・・・発生量「やや多」

- ・開花期以降に発生が見られるほ場では、着莢期から子実肥大中期を重点に2回以上薬剤を散布する。
- ・今後の発生がやや多くなると予想されるので、ほ場の発生状況に注意し、適期防除を実施する。

▶ウコンノメイガ・・・・・・・・発生量「平年並」

- ・ほ場内の大豆1本あたりの葉巻数が1.3本を超える場合は、減収が見込まれるため速やかに防除を実施する。

▶フタスジヒメハムシ・・・・・・・・発生量「平年並」

- ・第2世代成虫の発生盛期（平年：8月下旬～9月上旬）に薬剤散布を実施する。

▶マメシンクイガ・・・・・・・・発生量「少」

- ・発蛾最盛期とふ化盛期（8月下旬とその7～10日後の9月上旬）にかけて1～2回薬剤を散布する。

▶食葉性チョウ目幼虫（オオタバコガ、ツメクサガ等）

- ・**防除情報第4号（宮城県病害虫防除所 7/22発行）において、オオタバコガの発生が広範囲で確認され、フェロモントラップ調査において誘殺数が前年より多くなっています。**高温が発生に好適であり、向こう1か月の平均気温は高く推移することから、早期発見と早期防除に努めましょう。
- ・中齢幼虫以上になると葉及び莢を加害し、被害が大きくなるので、早期発見・早期防除に努め、若齢幼虫期に薬剤防除を実施する。

■令和6年 秋の農作業安全確認 実施期間 9月1日～11月30日  
スローガン 「徹底しよう！農業機械の転落・転倒対策」

近年、様々な農業機械の普及、農業従事者の高齢化等により、機械操作のミス、過信と慣れによる安易な作業が重大事故に結びつき、依然として農作業死亡事故が発生しています。

農作業安全の取組については、「農作業安全情報センター」のホームページで確認することができます。